

## 目次

朱色の命

1

ただ独り歩め

99

あとがき

197

朱色の命

電車のドアが開くと、草いきれを含んだ真夏の熱風が、僕の体をなめまわすようにドツと全身を包み込んできた。神経を麻痺させるような激しいセミの音が、ほとんど徹夜状態の僕の頭の中にジンジンと響き渡り、意識の働きをさらに鈍化させていく。

約三年ぶりに降り立った故郷の駅のホームからは、はじめて田舎を離れた二十年前とほとんど変わらない景色が見渡せる。駅の正面に立つ五階建てのビルは高校時代と少しも代わり映えがしないし、駅をはさんで反対側に広がるあたり一面の田んぼには、夏の強い日差しを浴びた稲が、昔と同じく緑の絨毯のように波打っていた。

タクシーに乗りこむと、僕は、父が入院したという病院の名前を運転手に告げた。歩いても十五分程度で着く距離だったが、徹夜明けの体にはそれも辛い。医者と交わした約束の時間もすでに若干過ぎてている。急がなきゃいけないのだ。

姉から電話がかかってきたのは、三日前。父が急きよ入院したから、一度帰ってきてく

れという電話であつた。しばらく続いた息苦しさが気になつて病院でレントゲン撮影をしてもらったところ、心臓が通常より大きく映っているらしい。原因ははっきりと分からないが、検査を兼ねて急きよ入院することになつたという。

約束の時間よりも二十分ほど遅れて病院に到着すると、僕は狭い応接室で待たされた。しばらくすると、担当の医者が入つてきた。三十代前半といった感じの医者だつた。

「ご兄弟の方はどうされたんですか？　ご一緒ではないんですか？」

「時間が合わなかつたので、とりあえず私ひとりで来たんですが」

医者は、苦笑いしながら、立つたまま言葉をつないだ。

「病状の説明は何度もできませんので、できれば、ご兄弟全員がそろつたときにしたいのですが。一人ずつ来られて、毎回同じ説明をするのは大変なんです」

「ということ、今日は説明ができないということですか？」

「できれば、後日、時間をあらためて来てもらえますか？」

約束の時間に若干遅れたとはいえ、仕事を懸命に片付けて、飛行機に飛び乗つて、東京から九州の片田舎までやってきたのに、その言いぐさはないだろう、僕は丁重に接しよう

とする気持ちがち切れてしまつて、語氣を強めて言い返した。

「東京から飛んで帰つてきたのに、それはしないでしよう。時間がないんだつたら、短時間でいいですよ。他の兄弟には私から伝えておきますから」

医者には、面倒な客にほとほと困つたというような表情を見せながら、説明するのはこれつきりにしてもらふということは何度も強調した。

僕は、こんな生意気なくそガキに父親の生死を握られているのが情けなく哀しかったが、後々問題を残すのも嫌だったので、ひとまず、全部了解したうえで、十五分以内で説明を聞くことにした。

心臓が肥大して見えるのには、大きく三つの原因が考えられるとのこと。もっとも厄介なものはがんである。非常に稀ではあるが、心臓を包む膜、つまり心膜の下にがんができていて、その心膜と心臓のあいだに水が溜まつている可能性があるというのだ。いずれにしても詳しい検査をしてみないとわからないが、その場合の治療方法をいくつか提示するので、どれを選択するか考えておいてほしいとのことであつた。

時間はきつかり十五分。医者は話を終えると、「時間ですので」と言い残して、さつさと

部屋を出ていった。

僕は医者の説明をメモした手帳をバッグの中にそそくさと押しこんで、父親の病室へと歩いていった。病室へと向かう廊下は、薄っぺらなスリッパの音を大げさにはね返し、不安と心細さを確実に増幅していた。

父は、母が十八年前に亡くなつて以来、ずっと一人で暮らしてきた。幸い、姉が車で十分ほどのところに住んではいたが、よくぞ、これまで気丈に暮らしてきたものだと思う。姉の話によると、男やもめの家にありがちな散らかし放題の家になることは絶対になかったそうだ。昔から潔癖症ではあったが、一人身になってからはさらに拍車がかかったように几帳面になつたらしい。それは、やもめ暮らしだから崩れた生活も仕方がないと、近所に思われてはならないという、父独特のプライドであるような気がした。

病室に入っていくと、六人部屋の一番窓際のベッドに父が横たわっていた。僕は極力感情を表に出さないように、「おお」とも「ああ」とも区別がつかない曖昧な声で言葉をかけた。

「おお、浩一、来たとか？ 無理せんでよかったとに。仕事は大丈夫か？」

父も淡々とした顔と声だった。

「大丈夫、大丈夫。仕事は一段落したところやけん」

禿げ上がった額に小さなシミがいくつもあるのは、八十歳の年齢としては当然だろうし、黒目の光が薄いのも仕方ないことだろうが、寝巻きの下に見えるあばら骨は少し哀しく見えた。

「千恵子君は元気か？」

父は、どういうわけか、僕の妻を君付けで呼ぶ。

「おう、元気たい。子どもも元気に育ちよる」

妻のお腹には、そのとき、四ヶ月になる子どもがいた。結婚してもなかなか妊娠せず、四年目にしてやっとできた子どもだけに、検査薬を片手に、トイレから「できたよ」と大きな声で出てきたときには、二人で文字通り小躍りして喜んだものだ。

「何ヶ月になったとか？」

「まだ四ヶ月」

「つわりはどうや？」

「そがん、酷くはなかごたる」

「そりゃあ、よかったぞ」

会話が途切れた。僕は、窓から見える田舎の夏空を見上げながら、言葉を探してみたが、夏空があまりにきれいで、日常生活用の会話がどうしても見つからなかった。

その日の夜は、誰もいない築三十年になる家で、一人で過ごした。夕食を作るにしても材料らしきものがほとんどなかった。かといって、外食をするような適当な店も近くにはない。仕方がないから、歩いて二十分くらいのところにあるスーパーマーケットで惣菜などを見繕って、一人で食った。

妙に赤い画面のテレビで、できるだけ楽しそうな番組を探してみたが、どれもこれも白々しくてつまらなかった。地方版のCMが気分をいっそう暗くした。

風呂でさっぱりしようかと思ったが、幼い頃は広く感じた湯船は狭くて窮屈だった。水滴がついた天井からは、黒ずんだカビが見下ろしていた。和室に敷いた布団はいかにもぼつねんとしていて、天井からも窓からも廊下からも誰かがじっと見ているようで落ち

着かなかつた。豆電球のほのかな明かりは、冴えきつた頭をさらに研ぎ澄まさせるばかりであつた。

翌々日、僕は、見舞いに行く前に、久しぶりに自分が生まれ育つたこの町の様子を見ておきたくなつた。本当であれば、タクシーで病院まで直行するはずだが、遠回りして歩きながら病院に行くことにした。

久しぶりに歩く町の裏通りには、二十年前とほとんど変わらない、時代から取り残されたような光景があちこちに広がっていた。それは、僕にかすかな安堵感をもたらしてくれたが、同時に、後ろを振りかえると誰もいないような空虚さも感じさせた。

しばらく歩くと、隣町との境を流れる押寄川のたもとに出た。この川が流れこんでいる有明海は、日本一、干満の差が大きい海だから、満潮のときには、海のほうから川上に向かって水が流れ込んでくるといふ奇妙な現象が見られる。山側のほうに向かって水が流れていく不思議な光景というものを、僕はここ以外の川では見たことがない。

川底は、有明海の干潟と同様、粘土質の土でねっとりとしていた。引き潮で水が引くと、

川幅はグンと狭くなり、灰色の粘土質の川底には蟹が住みつく穴が無数に見えた。水は、黄土色の絵の具を流したような色で、透明度はゼロだ。

僕が中学生のころ、友達と二人でこの押寄川で釣りをしていると、友達が薄気味悪いものを釣り上げた。僕とは少し離れたところで釣っていた彼は、血相を変えて僕のところへ走ってきた。

「浩一、ちょっと来て！」

「なーんや、今、よかとこばってん」

「よかけん、来てよ」

彼は、僕の手を強引に引っ張ると、川下のほうへと、どンドン歩いていった。

「どうしたと」

「髪の毛、髪の毛が釣れたと！」

「何じゃ、そりゃあ」

僕は何のことかさっぱり分からないまま、彼の釣り場に引っ張りこまれた。

「これよ、これ！」

彼は、その黒い塊から三メートルほど離れたままのところに立ち尽くし、おそろおそろ指先でそのものを指していた。

そこには、真っ黒い髪の毛の束がぱつぱつと落ちていた。女性の髪らしく、長さは三十センチほどもあった。髪の毛束からはまだに水のしずくがコンクリートの上にダラダラと流れている。

目を凝らしてみると、髪の毛の束の片側には、頭皮に収まっているはずの白い毛根がうっすらと見て取れた。命の片割れを探してでもいるかのように、哀しく白くふやけていた。

「何だよう、これは！」

僕は、彼と同じ位置まで後ずさりしながら、独り言のように叫んでいた。

「なんか急に竿が重くなったから、うなぎが釣れたと思って、大急ぎで上げたら、コレよ。重くて重くて、竿がえらいしなったよ」

「これ、女の髪やろうか？」

「女か男か知らんけど、間違いなく、人間の髪やろう」

ただ独り歩め

目の前に立ちはだかる巨大な水槽の壁は、ガラスでありながら、高層ビルの外壁のように威圧的だった。高さ十メートルはあろうかと思われるその中には、海水が湛えられていて、青黒く揺れていた。

ヒロは、入場の際にスタッフから手渡された透明な雨合羽のボタンをはめ終えると、その高さを確かめるように、首を上に向けた。頂上はずいぶん遠いところにあつて、井戸の中に落とされたような圧迫感が前方から迫ってくる。

「もし、これが決壊でもしたら、一瞬で終わりだな」

そう思ったとき、右手を引っ張る娘のユリが小声で呟いた。

「パパ、怖いよ」

「大丈夫だよ」

ヒロは、笑いながら、幼稚園の年長組になったばかりのユリの左手を両手で撫でた。

そこは、巨大水族館のイベント広場だった。野球場の扇形スタンドのようなばかりで、観客席には、これからこの水槽で繰り広げられるショーに胸を躍らせる人たちが隙間なく座っていた。ヒロが左右に眼をやると、緩やかなカーブを描いて延々と座席が配列されており、左右両端の観客は、男女の区別さえもつかないほど小さく見えた。後ろを振り向くと、最後尾まで座席が配列されていたが、それは今にも倒れてきそうなほど急勾配に思えた。

開演直前の観客の興奮は、うねりのようなざわめきとなって会場を包み、最前列に座るヒロとユリもそこに同化していた。

最初に披露されたイルカのショーは、どこにでもあるような、たわいないもので、最前列に座るヒロたちにとっては意味のないショーだった。なにしろ、目の前にそびえ立つのは青黒く見えるガラスの壁であり、水上で繰り広げられている愛くるしいショーは、ほとんど見えないのである。かろうじて、水中に落下した後の動きはリアルに観察できたのだが、それは本来のショーの面白さではない。

イルカが舞台から去ると、いよいよメインイベントだ。観客たちは一斉に雨合羽のフー

ドを頭にかぶせ、場内アナウンスに耳をそばだてた。

「それではいよいよテン・カウントと同時に、右側の大きな穴から登場します！」

数え始めた女性アナウンサーの声と気持ちを含ませるかのようになり、観客の神経は眼前の水槽に集中し、期待は急カーブを描いて高まった。ピークを迎えたその瞬間、巨大な生物が右斜め上から水中に突入してきた。水面を叩く音が爆発音のような振動をもって会場中に響き渡り、同時に水槽には白い泡が右斜め上からヒロの眼前を通って左斜め下に向かって走り去った。その美しい線が崩れると、無数の白い泡が水面に向かって一斉に舞い上がり、まるでレースのカーテンのように広がった。同時に、頭上からは大きな水滴がバチバチと落下してきた。その瞬間、会場は大きな歓声と拍手と興奮に包まれた。

それは鯨だった。

動物愛護団体からは激しい非難が起きそうなこの奇妙で趣味の悪いショーは、この水族館の最大のイベントで、毎日一回、午後二時から始まる。その時間に合わせて遠隔地からも多くの客が集まってくる。

ヒロは、瞬間の出来事を見逃さないように目を見開いていた。美しい泡のカーテンが

消え去ると、鯨の大きなシルエットが青黒い水の奥から徐々に現れて来て、ヒロの顔を横切った。水槽のガラスを突き破って突進してきそうな迫力は、もしも水槽が決壊したら、という想像と相まってヒロの体を思わず背後にのけぞらせた。

鯨は、しばらくの間、巨大な水槽の中を悠然と泳ぎ回ると、バケツからぶち撒かれたオキアミの塊におびき寄せられるように、左端の大きな穴の中へと消え去った。その後どうなったのかは分からない。時間にすればわずか五分ほどだったけれども、突入の瞬間の、爆発的なエネルギーが凝縮した音と映像と生命の存在感は、遠隔地からも足を運ぶにふさわしい刺激だった。

その水族館の外観は、横から見ると直角三角形の定規のようで、一番短い辺を地面に横たえたような形状をしていた。地面から垂直に伸びる辺の先端には、もうひとつの斜めに走る辺が合流し、鋭角な先端を形作っていた。天を目指す教会の尖塔というにはあまりにも無機質だったが、水族館がどうしてこのような形状なのかは不明だった。ざっと見たところ三百階はありそうな超高層ビルの外壁は、全てガラス張りで、天気の良い日中は、ガ

ラスに反射する太陽の光が天高くまで光り輝いていた。

水族館は、断崖絶壁の上に建っていた。なだらかな弧を描く海岸線は、高さ十メートルほどの切り立った岩肌を露にしなから、数キロも延々と続いている。周囲に建物はひとつもない。断崖で突然切れる草原が、ただどこまでも広がっているばかりだ。

水族館へとつながる道路には、人気は感じられない。広い大地の中を真っ直ぐに、それだけが人工物であることを誇張するかのようには走っており、そこを走る車やバスには、水族館を目指す人たちしか乗っていないかった。

水族館は、地上二階構造だった。三階より上の階には何があるのかは不明だった。さまざまな事務所が入ったテナントと考えるにはあまりに辺鄙な場所だったし、人々が暮らすマンションにしては生活感がなさ過ぎる。いずれにしても、海の生物を観に来た者にとつて、その建物の上が何に使われているかは、どうでもよいことだった。

ヒロが訪れたその日は、秋晴れの澄み切った空が広がっていて、光輝く尖塔は、その青を切り裂くように天に突き刺さっていた。無機質な美しさが、遙か彼方で輝いていた。

鯨のショー用の巨大水槽は、その建物の中ではなく、隣接エリアに設置されていた。ショーを見終えたヒロとユリは、人の流れに乗ってゆつくりと出口へと向かい、建物のなかへと入っていた。そこには、広いという以外には他の水族館とさほど変わらない空間が広がっていた。深海魚や熱帯魚や淡水魚などが、その生息エリアによって一階と二階にわたってセパレート展示されていた。

ヒロは、ユリの手を引きながら二階へと向かった。薄暗い空間の中でクラゲや巨大な蟹に見とれながら、散策するように空間の中を移動した。ユリが立ち止まったのがマンボウの水槽の前だった。生身のマンボウを見たのはヒロも初めてだったが、その大きさに驚いた。二畳分ほどもある平べったい体が狭い水槽の中で、泳ぐというよりはむしろ漂っていた。目は白くにこり、口は常に半開きで、半ば死にかけているように見えた。

「パパ、なんか変だね。この魚」

「視力が悪いのかなあ」

水槽のなかには、マンボウのガラス衝突を防ぐために透明なビニールシートが張られていた。感度の悪そうな体がそれに触れるとマンボウはやつと異物の存在を感じ取るら

しく、方向転換をゆっくりと行う。ヒロは、その奇妙な動きにぼんやりと見とれていた。今、自分がどこにいて、何をしているのかさえも分からないようなその姿は、愛くるしいと同時に滑稽でもあった。

マンボウの前を立ち去ろうとすると、ユリがいないことに気が付いた。

「ユリ！」

小声で叫んで神経質に辺りを見回しても姿が見えない。

ヒロは、小走りに走り出した。

「ユリ！」

赤いワンピースと黄色いリボンがついた髪を探して、通行人のあまりにも遅すぎる歩行を疎ましく思いつつ、脇をすり抜けながら娘の名前を呼んだ。何しろ巨大な水族館だ。一度迷子になってしまうと簡単には探し出すことが難しい。正当な理由も動機もなく小さな女の子をすれ違いざまに刺し殺した少年のニュースが昨日、流れたばかりだ。

冷静になろうといったん立ち止まり周囲を見渡すと、ロープが張られた昇り階段が目に入った。明かりもついていない薄暗い階段には当然誰も往き来はしていなかったが、ヒロ

**長野修** (ながの・おさむ)

1960年、佐賀県生まれ。明治大学政経学部卒。新聞社、出版社などを経てフリーのライターに。教育、医療、企業経営などを中心に執筆。平成17年、『朱色の命』で第16回日本海文学大賞を受賞。

## 朱色の命

---

2020年10月20日 初版第1刷印刷

2020年10月30日 初版第1刷発行

著者 長野修

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷 組版／ロン企画

ISBN978-4-8460-1991-4 ©2020 Nagano Osamu, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。